

スポーツ支援者の資質向上のための
『障害のある方への
スポーツ指導・関わり方
入門ハンドブック』

活用事例集

－ 指導スキル向上のための研修等の実践と工夫 －



目次

本事例集を作成した背景・趣旨・目的	2
用語の定義	3
本事例集の見方	4
研修対象者一覧	5
事例 01 岐阜県地域スポーツ課	6
事例 02 セントラルスポーツ株式会社	7
事例 03 公益財団法人 横浜市スポーツ協会	8
事例 04 大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）	9
事例 05 東京都 公益社団法人東京都障害者スポーツ協会	10
事例 06 社会福祉法人大阪市障害者福祉・スポーツ協会	11
事例 07 茨城県教育委員会	12
事例 08 北九州市中学校保健体育科研究部会	13
事例 09 公益社団法人広島県パラスポーツ協会	14
事例 10 順天堂大学 スポーツ健康科学部	15
事例 11 びわこ成蹊スポーツ大学	16
事例 12 日本福祉大学	17
事例 13 国際武道大学	18
事例 14 公益社団法人日本理学療法士協会	19
事例 15 順天堂大学大学院 保健医療学研究科	20
事例 16 白蓮会館	21
事例 17 公益社団法人日本リハビリテーション医学会	22
まとめ① 受講者アンケート結果	23
まとめ② ハンドブックを活用した研修実施のポイント	24

「障害のある方へのスポーツ指導・関わり方入門 ハンドブック」について

ハンドブックとは

スポーツ庁は、障害の有無に関わらず、指導者がスポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法を習得することで、**インクルーシブなスポーツ実施環境の整備の一助**となることを目的に作成しました。

ハンドブックで学べる内容

本ハンドブックは障害種に関する知識や、様々な障害種の特徴を踏まえた**指導のコツ・ポイント**を学ぶことができます。

それらに加えて、**スポーツをいかに楽しんでもらえるか、指導を受ける側一人ひとりの特徴に応じたコミュニケーションを意識する**といった指導者の心構えも学ぶことができます。

ハンドブックを通じて期待されること

ハンドブックを通じて学ぶことのできる内容は、**運動の苦手な方や子ども・高齢者への指導等に活用**することができ、**指導者の指導対象や範囲(年齢や運動レベル等)の拡大**も期待されます。

本ハンドブックはこちらからご覧・ダウンロードできます

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop06/list/detail/1379526_00004.htm



本事例集作成の背景・趣旨、目的

本ハンドブックを、障害のある方へのスポーツ指導に関わり得る指導者等に対する研修等において、広く活用いただくことを目的として、本ハンドブックを活用した研修等を事例集として取りまとめています。

本事例集のポイント

- 本事例集では、「どのように研修を組み立てれば参加者に具体的な指導方法が伝わるのか」、「現場で役立つ指導のコツやポイントは何か」といった実践的な内容を受講者に伝えるための、研修会などにおけるハンドブックの活用の仕方や研修会の構成などの工夫が整理されています。
- こうした工夫は、**障害のある方への指導経験がない方でも必要な知識や配慮点を理解し、指導場面を具体的にイメージしやすくなる**ことが期待されます。
- また、障害の有無にかかわらず指導に携わる方々に**新たな視点や指導のヒントを提供する機会**になり、事例を通じて、ハンドブックの活用の仕方を知ることができます。

本事例集の想定読者

障害の有無に関わらず、スポーツを実施する方に指導・支援する以下の方に研修などを企画・運営・実践する方

- 例)
- 学校教員(特別支援学校・学級に限らず、小・中・高の体育指導にあたる教師など)
 - 学生(大学等における体育やスポーツの指導方法に係る講義、実技 等)
 - 地域のスポーツクラブ職員、スポーツイベントや大会等のボランティアスタッフ
 - スポーツ施設職員
 - 医療関係者、福祉関係者

用語の定義

スポーツ指導時のポイントを取りまとめるにあたり、「スポーツ」や「障害のある方」等の用語を用いています。各種用語の定義や表記方法等について、以下のように整理しています。

様々な捉え方があることは十分に承知していますが、本事例集での定義といたします。

スポーツの定義

自身の体力の向上や健康の維持、ストレス発散等、より快適な生活を送ることを目的として実施する運動や活動(歩く、泳ぐ、トレーニング、ストレッチング、レクリエーション等)をスポーツとして捉えています。

そのため、本ハンドブックでは、他人と競い合うスポーツ(競技スポーツ)のみではなく、より広い範囲をスポーツとして捉えて、内容を取りまとめています。

障害の表記

“しょうがい”は、「障害」や「障がい」、「障碍」と様々な表記が活用されていますが、本事例集では法律や条例等で用いられている「障害」を用いています。

障害のある方の定義

障害者基本法で、「障害者」は「身体障害、知的障害、または精神障害がある者であって、障害および社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にある者をいう」と定義されています。

本事例集においても、この定義に基づき、基本的には身体障害や知的障害、精神障害という分類を踏襲しています。なお、「障害者」については、「障害のある方」と記載しています。

本事例集の見方

ここでは、このあとの事例ページの見方を解説いたします。

各事例では、様々な対象に対して実施した研修会などの概要や具体的な内容をまとめており、ハンドブックを活用した研修会を受講した受講生の声も含めて掲載しています。

主な研修参加者

事例
01

対象：スポーツ関係者・教育関係者・福祉関係者

研修実施団体名称

01

岐阜県地域スポーツ課

参加者:特別支援学校の教員、小中学校の教員、県内の少年団の指導者、総合型地域スポーツクラブ指導者、県内スポーツ推進委員、部活の外部コーチ、放課後等デイサービススタッフ、民間企業、民間スポーツ指導者

研修参加者詳細

① 研修会の目的

- 障害のある方が身近な地域でスポーツ活動に参加するためには、その受け皿となるスポーツ団体及び指導者の存在が不可欠である。岐阜県では、地域でスポーツ指導を深めていただき、一人ひとりが主体的に活動できる環境づくりを推進し、令和6年度より本研修を開始した。

研修会を開催した趣旨・目的を記載しています。

② 研修プログラム

- 【第一部】講演:「地域に広げる！障害児・者と共楽しむスポーツの環境づくり」
(講師:兎玉 由美)
- 【第二部】グループワーク
・障害のある方へのスポーツ指導の工夫
・誰もが楽しめるスポーツの環境づくり

研修プログラムの概要を記載しています。(ハンドブックを活用している部分は(★ハンドブック活用)と表示)

講師	日本福祉大学 スポーツ学専攻 准教授 伊藤 則子 氏 東京 2020 パラリンピックバドミントン女子ダブルス銅メダリスト
----	---

③ 研修内容

- 講演
 - ・パラスポーツの解説
 - ・スポーツ・イベント実施時における障害特性に応じた配慮例
- グループワーク
 - ・アイマスクを使ったアクティビティ
 - スポーツ指導や活動場面における、言葉かけの重要性をシミュレーションを通して工夫を体験。
 - ・ハンドブックの紹介 (P12(施設関連)、P20~(障害への対応))
- 誰もが楽しめるスポーツづくり
 - ・ポッチャ、バドミントンを用いた、誰もが楽しめるルール等の工夫
 - ポッチャではペットボトルやフープを活用し、バドミントンではコート広さを工夫して実施。

実施した研修の内容や、ハンドブックの具体的な活用方法について記載しています。



講義の様子



グループワークの様子

受講者の声

ストーリー性がある

- ・ハンドブックの内容全てが実践型で、理解が深まりました。
- ・スポーツという固く捉えがちだったが、自由に良いというように発想転換できた。

研修やハンドブックに対する受講者の感想を記載しています。

研修実施者の声

- ・障害のある方にスポーツを教えることがないまま、これを自ら教えられる。ストーリー性あってよい。(岐阜県)
- ・特別支援学校の教員の働きが、全体像、ハンドブックの活用方法がわかりやすく書いてある。(講師)
- ・障害特性に応じた配慮が、わかりやすく書かれている。(講師)
- ・パワーポイントやイメージができるような動画(ショート動画)もあるとよい。(岐阜県)(講師)

研修担当者のハンドブックに対する感想、活用方法の提案等を記載しています。

研修対象者一覧

団体名	ページ	スポーツ関係者		教育関係者	学生	福祉関係者		医療関係者	その他
		スポーツ指導者	スポーツ施設職員	学校教職員	大学生、大学院生	福祉サービス事務所職員	放課後等デイサービス職員	医療従事者	一般の方
01 岐阜県地域スポーツ課	6	●		●		●			
02 セントラルスポーツ株式会社	7	●	●						
03 (公財)横浜市スポーツ協会	8		●					●	
04 大阪府立障がい者交流促進センター	9			●					
05 東京都 (公社)東京都障害者スポーツ協会	10			●					
06 (社福)大阪市障害者福祉・スポーツ協会	11			●					
07 茨城県教育委員会	12			●					
08 北九州市中学校保健体育科研究部会	13			●					
09 (公社)広島県 パラスポーツ協会	14				●				
10 順天堂大学 スポーツ健康科学部	15				●				
11 びわこ成蹊スポーツ大学	16				●				
12 日本福祉大学	17				●				
13 国際武道大学	18				●				
14 (公社)日本理学療法士協会	19				●				●
15 順天堂大学大学院 保健医療学研究科	20				●			●	
16 白蓮会館	21						●		
17 (公社)日本リハビリテーション医学会	22							●	

岐阜県地域スポーツ課

参加者：特別支援学校の教員、小中学校の教員、県内の少年団の指導者、
総合型地域スポーツクラブ指導者、県内スポーツ推進委員、
部活の外部コーチ、放課後等デイサービススタッフ、民間企業、民間スポーツ指導者

① 研修会の目的

- 障害のある方が身近な地域でスポーツ活動に参加するためには、**その受け皿となるスポーツ団体及び指導者の存在が不可欠である**。岐阜県の現状として、スポーツをする場が少ないのが課題であった。
- そこで、**地域でスポーツ指導に携わる団体の職員や指導者を対象に、障害のある方のスポーツ指導に関する知識を深めていただき、一人でも多くの障害のある方がスポーツに親しむことができる体制を整備するため、令和6年度より本研修を開始した。**

② 研修プログラム

- 【第一部】講演：「地域に広げる！障害児・者と共楽しむスポーツの環境づくり」
(講師：兒玉 友 氏、伊藤 則子 氏)
- 【第二部】グループワーク (ハンドブック紹介)
 - ・障害のある方へのスポーツ指導上の留意点
 - ・誰もが楽しめるスポーツづくり

講師	日本福祉大学 スポーツ科学部スポーツ科学科 准教授 兒玉 友 氏 東京 2020 パラリンピック バドミントン女子ダブルス銅メダリスト 伊藤 則子 氏
----	--

③ 研修内容

■ 講演

- ・パラスポーツの解説
- ・スポーツ・イベント実施時における障害特性に応じた配慮例

■ グループワーク

- ・アイマスクを使ったアクティビティ(2人1組のペア)
一方がアイマスクを着用し、指導者の動きを覚え、言葉だけで相手に伝える。
→**スポーツ指導や活動場面における、言葉がけの重要性とシンプルに伝える工夫を体験。**
- ・ハンドブックの紹介(P12(施設関連)、P20～(障害への対応))

■ 誰もが楽しめるスポーツづくり

- ・ポッチャ、バドミントンを用いた、**誰もが楽しめるルール等の工夫**
→ポッチャではペットボトルやフープを活用し、バドミントンではコート広さや人数(3人1組など)を工夫して実施。



講義の様子



グループワークの様子

受講者の声

ストーリー性があり、パラスポーツ指導初心者にも使いやすい

- ・ハンドブックの内容全てが興味深く、今後じっくりと読んでみようと思います。
- ・体験型の研修が、理解が深まって良かった。
- ・スポーツというと固く捉えがちだったが、自由で良いというように発想転換できた。

研修実施者の声

- ・障害のある方にスポーツを教えたことがない人も、これを見たら教えられる。ストーリー性もあってよい。(岐阜県)
- ・特別支援学校の教員の立場でも勉強になる。紙で配るといいと思う。(岐阜県)
- ・全体像、ハンドブックの使い方、活用ポイントがありわかりやすい。数値も示しており、指導の入口に必要なことが書いてある。(講師)
- ・障害特性に応じた配慮についてしっかり書いてある。情報が網羅してあるのに内容がまとまっていてよい。(講師)
- ・パワーポイントやイメージができるような動画(ショート動画)もあるとよい。(岐阜県)(講師)

セントラルスポーツ株式会社

参加者：スポーツクラブのインストラクター、スタッフ

① 研修会の目的

- セントラルスポーツ株式会社では、2022年に今回研修を行った稲毛海岸店を含む千葉県3店舗でパラ水泳教室を開講した。その後順調に利用者、参加者が増えていた中で、これまで障害のあるスクール生の指導に関わってきたインストラクターだけでなく、**普段障害のあるスクール生の指導に関わっていないスタッフも含め全体に対し、パラ水泳教室の趣旨や、パラスポーツの理解を深めてもらう目的でハンドブックを使った研修を実施した。**
- 研修は、稲毛海岸店の全体ミーティングの場を活用して実施した。ハンドブックは研修参加者だけでなく、一部の部数を店舗に置いて、参加できなかったスタッフも含め全員が閲覧できるようにした。

② 研修プログラム

- 同社のパラ水泳教室立ち上げの経緯を説明
- 稲毛海岸店のパラ水泳教室インストラクターによる説明(指導するうえで日頃気を付けている点等)
- 講義(★ハンドブック活用) ※ディスカッション、質疑応答あり

講師

セントラルスポーツ株式会社 営業企画部 平山 智志 氏

③ 研修内容

- 日頃の業務の中でパラ水泳教室を見たことがないスタッフもいたため、まずはじめに、会社としてのパラ水泳教室立ち上げの経緯を説明した。
- 現在パラ水泳指導をしている3人のインストラクターが、実際の指導や、気を付けていること、障害のない方のスクールとの違いについて説明した。

<ハンドブック活用>

- 参加者にパラ水泳教室の理解を深めてもらうため、ハンドブックを全員の手元に配り、ハンドブックの内容に沿って説明した。説明箇所は、主に**第3章の「障害のある方へのスポーツ指導の実践」**とした。普段障害のある方の指導に関わっている人も多く、興味のある人が多いのでディスカッションや質疑応答を入れて研修を進めた。
- パラ水泳教室は知的障害、発達障害の子ども(主に幼児～小学生)を対象にしているため、参加スタッフにはハンドブックの第3章のうち**P.26(知的障害・発達障害)**を軸に話した。例えば**知的障害と言っても、障害者手帳の有無、同じ障害種にも色々な種類(発達障害であれば自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症など)があるということ**を、研修によって知識を整理できた。



ハンドブックを活用した研修の様子

子どもの障害有無に関わらずスポーツ指導に共通するポイントを網羅

受講者の声

- パラ水泳教室では、通常の水泳教室のような段階指導とは異なり、インストラクターや保護者と楽しく体を動かし、気付いたら泳げるようになっていたというカリキュラムにしている。**段階的な指導が苦手な人たちを受け入れられるカリキュラムは意義があるのだと、改めて理解することができた。**
- 知的障害といっても、**障害の種別による違いがあることがよく分かった。**

研修実施者の声

- 実際にスポーツ指導に関わっているスタッフにとって、スポーツ指導の実践を軸にポイントが整理されていたので、**実際の指導と合わせて注意すべき点がイメージしやすかった。**
- ハンドブックに書いてある指導のポイント(粘り強く指導する、スモールステップを意識するなど)は、**障害のない子どもへの指導とも共通するため、障害の有無に関わらず、指導者が学ぶべき重要なポイントがまとめられている。**

公益財団法人 横浜市スポーツ協会

参加者：スポーツ施設部に所属する職員、スポーツ医科学センターに所属する職員、指導に携わる職員

① 研修会の目的

- 横浜市スポーツ協会では、管理施設において、ノーマライゼーションに関する研修を実施しているが、施設により内容にばらつきがあった。横浜市スポーツ協会職員が、スポーツ庁が作成したハンドブックを知ったことをきっかけに全体研修として、障害のある方へのスポーツ指導・関わり方について、グループワーク形式の研修を行った。
- 本研修では、ハンドブックを活用することにより、スポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法の習得や、インクルーシブなスポーツの実施環境の整備に繋がる他、運動の苦手な方への指導や、子ども・高齢者への指導等、指導の対象や範囲の拡大を目的としている。

② 研修プログラム

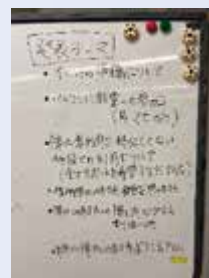
- 講義(★ハンドブック活用)
- グループディスカッション
- アイスブレイク(ロールプレイ)
- 発表及び講師によるフィードバック

講師

順天堂大学 保健医療学部 理学療法学科 同大学院保健医療学研究科 理学療法学専攻 教授 相澤 純也 氏
(公財)横浜市スポーツ協会 ウェルネスプロモーション課 吉元 麻友美 氏

③ 研修内容

- 講義では、ハンドブックを基に、障害のある方へのスポーツ指導・関わり方に関する基本を解説。
- グループディスカッションでは、業務の中で「障害のある方への対応で苦慮したこと」について発表し、ハンドブックを参考にしながら、その対応の仕方を議論した。(1グループ5名、6グループ)
- 最後には、各グループの議論の結果を発表・共有し、講師からフィードバックを行った。
- 途中、アイスブレイクとして、障害のある方へのスポーツ指導についてのロールプレイを行った。



ハンドブックを活用したディスカッションの様子

<ハンドブックを活用したディスカッション例>

- ①障害のある方への対応で苦慮したことやエピソードを1人ずつ発表・共有
- ②グループで話し合うテーマを1つ決める
- ③求められるべき対応やよりよい対応・対策などハンドブックを活用して深堀
- ④内容をまとめて1グループずつ発表

ハンドブックをベースに踏み込んだ議論に発展できる

受講者の声

- 障害種別にその特徴や指導方法が紹介されているので、指導対象の背景を踏まえた指導方法を考えることができた。
- コミュニケーションの仕方が役に立ちそう。指導するときの考え方や進め方(スモールステップなど)が参考になった。

研修実施者の声

- 通常のディスカッション研修では、困っていることの共有はできても、その解決策を考えてもらうためには解決策の情報・材料を提供する必要があり、講師は事前の準備に多くの時間を要する。今回の研修は、ハンドブックを活用することで、参加者が日頃の指導において困っていることに対してどう対応すればいいかといった解決策まで考える機会となった。また、ハンドブックがあるので、講師を含めた研修実施者側の準備時間の短縮につながった。
- ハンドブックは、ベーシックな部分がまとまったテキストになっている。これまで、基本がまとまった教材がなかったので初心者向けの研修の教材としても使いやすい。

大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）

参加者：大阪府内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員

① 研修会の目的

- 当研修は学校教員を対象とし、毎年実施している。教員にパラスポーツを知ってもらおうと共に、教員を通じて児童生徒にもパラスポーツを知ってもらおうことを目的としている。
- パラスポーツの認知度は高まっているが、パラリンピックなど競技スポーツのイメージが強い。パラスポーツがあることは知っていても、自分とはかけ離れたものというイメージがあると、どうやって始めたらいいかということまで考えがいかなくなってしまう。競技だけではなく、パラスポーツにも色々なスポーツがあること、パラスポーツは、誰でもできるものだということを知ってもらいたい、と考えており、今回の研修を企画している。

② 研修プログラム

- パラスポーツ指導上の留意点（★ハンドブック活用）
- 手話講習
- 実技体験（車いすバスケットボール・フライングディスク・シッティングバレーボール・ボッチャ）

講師

大阪府立稲スポーツセンター・大阪府立障がい者交流促進センター職員
（日本パラスポーツ協会公認 パラスポーツ指導者）

③ 研修内容

- ・午前は講義、午後は実技という構成で実施。
- ・講義の「パラスポーツ指導上の留意点」においてハンドブックを活用。ハンドブックの構成に沿って、写真や実例を交えて解説した。

<ハンドブック活用>

- ・第三章では、それぞれの障害種別について、実例を挙げながらわかりやすく説明を行った。

【視覚障害】バスケットボールをした例を紹介。何色が見えるか確認し、少し見える「青色」のカラーコーンでガイドをすることにより、ゴール体験ができた。（ハンドブックP20,21）

【知的障害・発達障害】発達性強調運動障害により、スポーツに消極的になるケースも多い。小さな成功体験を積んでもらうことが重要。情報を簡潔に伝え、活動の様子を見て理解しているか確認する。（ハンドブックP26,27）



ハンドブックを活用した講義の様子

パラスポーツを身近に感じることができる

受講者の声

- ・たくさんの知識を学ばせていただいたので、ぜひ学校に持ち帰り、授業で使わせていただきます。
- ・とてもわかりやすく教えてくださったので、前向きに参加する事が出来ました。

研修実施者の声

- ・ハンドブックは、パラスポーツ指導の基本的なことが書かれている。初心者向けとして学ぶべき内容が掲載してある。
- ・全ての障害が、キーワードを漏らさず広く紹介されていることが良い。講義も、ハンドブックに沿って網羅的な内容とした。これまでの教員向け研修では触れなかった精神障害や視覚障害などについても紹介することができた。
- ・コミュニケーションの重要性に触れていることが良い。また、全体的にパラスポーツが身近に感じられるように構成され、一つ一つの項目が理解しやすいように細かく紹介されている。

東京都 公益社団法人東京都障害者スポーツ協会

参加者：東京都内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教職員及び指導員等

① 研修会の目的

- 東京都と公益社団法人東京都障害者スポーツ協会との共催により、区市町村職員や教職員等を対象に、パラスポーツ事業実施のきっかけづくりや好事例の共有・普及を図り、より身近な地域においてパラスポーツ事業を企画立案・実施する人材を育成する「東京都パラスポーツセミナー」を、対象者別に年4回開催している。
- 本研修は、障害のある子どもがパラスポーツに親しむためのキーパーソンである教職員等を対象に、障害特性に応じた運動・スポーツの指導に役立つ知識・ノウハウや障害のある生徒とない生徒と一緒に参加できる体育授業等の実践方法等を学ぶ機会として開催した。

② 研修プログラムの

- 【講演】パラスポーツの振興(★ハンドブック活用)
- 【事例紹介】障害特性に応じた運動・スポーツ支援の工夫に係る事例紹介
- 意見交換会
- 【情報提供】東京都におけるパラスポーツ振興について
- 【施設見学】東京都障害者総合スポーツセンター

講師 【講演】スポーツ庁 健康スポーツ課 専門職 見供 翔氏
【事例紹介】順天堂大学 スポーツ健康科学部 准教授 村上 祐介氏

③ 研修内容

- 講演ではハンドブックの構成に沿って、障害のある方のスポーツ参加に関する課題や、指導者のマインドセット、配慮のポイント等を紹介。特に、障害のある方がスポーツに参加しづらい背景や、子どもの頃の運動経験が将来のスポーツ実施率に影響することなど、教育現場にも通じる視点を示した。
- ハンドブックの活用方法について紹介した。

個人 【初めて障害のある子どもと関わる方】
・教材の一つとして参照、生徒への理解・個別対応のヒント 等
【障害のある子どもと関わる機会が多い方】
・職員研修の教材、校内の支援体制づくり 等

団体 定期的に行われる勉強会や研修会で教材の一つとして活用



ハンドブックを活用した講演の様子

共通理解、支援の質の向上

運動が苦手な児童への指導にも生かすことができる内容

受講者の声

- 障害のある方への指導に留まらず、運動が苦手な児童に対する指導にも生かすことができると感じた。
- ルールの柔軟な調整により、特性に合わせた指導が可能であること、パラスポーツを通じて「違いを認め合う」教育に繋がるという視点は、道徳や学級活動とも連携できそうだと感じた。
- 障害者児・者のスポーツライフに関する調査(障害のある方のスポーツ実施状況などのデータ)、ハンドブックの指導者の心構えなどが印象に残った。

研修実施者の声

- 今回の研修は、障害のある方へのスポーツ指導に関する基礎的な理解を深める貴重な機会となり、ハンドブックを通じて指導者としての心構えや障害種の特性に応じた配慮の重要性を学ぶことができたことは大きな成果と捉えている。
- ハンドブックは、技術面だけでなく、コミュニケーションの重要性など、障害のある方に関わる姿勢に焦点を当てている点も印象的。障害のある方との関係づくりにおいて重要な視点だと感じた。

社会福祉法人大阪市障害者福祉・スポーツ協会

参加者:大阪市内の小学校・中学校・高等学校・支援学校の教員

① 研修会の目的

- 次の目的をもって実施
 - ① 体育の授業でパラスポーツをどう扱えばよいかわからないという教員の参考にしてもらうため
 - ② 障害のある児童・生徒が卒業後にスポーツに取り組む場所があることを教員に周知するため
 - ③ 毎年5月に開いている大阪市障がい者スポーツ大会の広報・周知のため

平成28年度(2016年度)、学習指導要領でオリンピック・パラリンピック教育の重要性が盛り込まれることになったことを踏まえ、平成29年度(2017年度)から研修を開始(大阪市委託事業)

② 研修プログラム

- ガイダンス
- 講義 (パラスポーツの概要や地域で活用できる資源の紹介など)
- 施設見学《大阪市長居障がい者スポーツセンター》(利用方法の案内を含む)
- パラスポーツ体験 (学校における体験学習での導入事例など)

講師

講義:大阪市障害者福祉・スポーツ協会
 パラスポーツ体験:シッティングバレーボール…嵯峨根 望氏 ボッチャ…曾根 裕二氏

③ 研修内容

■ 講演

- ハンドブックについて紹介し、3章構成(パラスポーツの基本、スポーツ指導の入り口、スポーツ指導の実践)であること、障害のある方のスポーツ実施率等の現状や目標数値、障害ごとの指導方法等について記載していることを説明した。
- センター指導員による学校での体験学習の支援、生徒のスポーツ活動の充実(競技用車いすの体験)、特別支援学級との交流、パラスポーツ用具の貸出など、現場で活用できる資源の紹介を行った。



講義の様子

■ パラスポーツ体験

- パラスポーツ体験では、講師の指導のもと、シッティングバレーとボッチャを体験した。
- ルール説明と練習の後、チームに分かれて試合を行った。講師からは、実際の授業における指導の工夫点がわかりやすく説明された。



シッティングバレーの体験



ボッチャの体験

ハンドブックの内容を他の教員と共有することで理解を深める

受講者の声

- シッティングバレーもボッチャも、障害の有無に関係なく楽しめることを再確認しました。
- 授業に取り入れて、生徒達が障害を理解し、パラスポーツについて学びきっかけにしたいです。

研修実施者の声

- 受講者には特別支援学校や特別支援学級の教員が多く、担当する生徒の課題への対応について問題意識をもって取り組んでおられます。ハンドブックを通じて、様々な障害の対応に視野を広げるとともに、教員同士が各々の課題認識を共有することを通して、障害のある生徒との関わりについて理解をさらに深めることができたと感じます。
- ハンドブックには当事者の声も記載されており、大変参考になります。

茨城県教育委員会

参加者：茨城県内の国公立小学校・義務教育学校前期の体育担当教員

① 研修会の目的

- 茨城県教育委員会では、**体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有できるよう、共生の視点を踏まえた授業づくりを実践することを目的として、学校体育実技講習会を毎年開催している。**
- 令和7年度は、13の講習会を開催し、授業担当者の資質向上と指導力向上を図った。13の講座を担当する講師は、「令和7年度体育保健体育指導力向上研修」に参加した教員に加え、大学教員等に講師を依頼した。
- その中の一つの講習会において、**体育が苦手な児童に体育が好きになる授業づくりを学ぶためには、アダプテッド・スポーツの考え方を活用することも方法の一つとして考え、齋藤氏（筑波大学、教授）に講師を依頼し、講習会の実施に至った（アダプテッド・スポーツの講座は今年度初めて設定）。**

② 研修プログラム

- 講義（アダプテッド・スポーツの説明など）
- 実技（準備運動編）
- 実技（主運動編「小学校体育科（第5学年及び第6学年のボール運動：ゴール型）」
- まとめ・質疑応答

講師

筑波大学 体育系 教授 齋藤 まゆみ 氏

③ 研修内容

■講義

- 講座では、**アダプテッド・スポーツ**について、また**インクルーシブ体育を実践するための考え方を事例を交えて解説した。**

■実技

- 受講生を10グループに編成し、各グループで、**児童がスポーツをする際にぶつかる困難、その困難を解消するための工夫、みんなで楽しめるようにする工夫など、以下の3つのテーマについてグループワークを行った。**
 - ・テーマ1:児童が「パスを出す・ドリブルをする」ときの難しさ・困り感（バリア）を考える。
 - ・テーマ2:児童のニーズに合わせて用具やルールの工夫を考える（さまざまな大きさや形のボールを使用、視界を遮るゴーグルを着用など）。
 - ・テーマ3:簡易ゲームを考案（楽しさやチームとしての一体感を感じるためには、どんな工夫をすればよいかなど）。
- ディスカッションをする際の参考としてハンドブックのURLを掲載し、障害に対する知識やその指導のポイント・コツを受講者が参照した。

体育が苦手な児童にも配慮した授業づくりに活用できる

研修実施者の声

- 本研修会を通じて、受講者である教員たちは、**児童が直面する課題について考えることができた。**
- また、課題に応じた手立て（人、もの、場所、ルールなどの変更や修正）を検討し、誰もが楽しめる簡易ゲームを考案する過程を通じて、**体育が苦手な児童にも配慮した授業づくりの視点や工夫を見出すことができた。**
- 本講習会で学んだ「アダプテッド・スポーツの考え方」の活用することで、**体育が苦手な児童を含めたすべての児童にとって体育が好きになるような授業実践ができるようになる**と期待できる。

北九州市中学校保健体育科研究部会

参加者：北九州市中学校保健体育科教員

① 研修会の目的

- 北九州市保健体育科研究部会では、毎年夏休みに伝達講習会を実施している。その中で、本年度は、「障がいのある方へのスポーツ指導の関わり方」について学び、それを踏まえて、日頃の保健体育の授業を見直し今後に生かしていくことで、生徒とのかかわり方や、きめ細やかな配慮等を行うことができるようにすることを目指し、実施した。
- 障害にも様々な種類があり、それぞれに応じた配慮が必要であることを、ハンドブックを通じて現場の教員に伝えることが重要であると考えている。

② 研修プログラム

- 講話「障がいのある方へのスポーツ指導の関わり方」(★ハンドブック活用)
- 伝達講習(ダンス、柔道)
- 振り返り

講師

北九州市 教育委員会事務局学校教育課 学校教育課 主任指導主事 瀧口 明 氏

③ 研修内容

- 今回の研修は、障害の有無に関わらず、スポーツを実施する人の特徴を踏まえ多様な指導方法の習得することの重要性や、そうすることで能力開発の貢献に資するとともに、インクルーシブなスポーツ環境の整備につながるということが説明された。

<ハンドブック活用>

- 講話では、ハンドブックに沿って主に知的障害、発達障害のある方のスポーツ指導について紹介した。楽しく運動をする方法や生徒への関わり方、声のかけ方などについて学んだ。
- きめ細やかな指導のポイントなど、参加者は新たな視点でインプットをしていた。

【主な活用部分】

- 指導する際の心構え、スポーツを実施するための環境整備・工夫、(P10~13)
- 知的障害・発達障害(P26,27)



ハンドブックを活用した講義の様子

すべての子ども達が多様性を認め合うための教育の一助とする

受講者の声

- 通常の学級に配慮を必要とする生徒が在籍しているという観点を常に持ち、誰にでも理解しやすく授業を展開することが大切ということを実感した。また、アダプテットの観点で教師自身の思考も常にアダプテットする必要があると認識した。
- ハンドブックを通して障害の有無に関わらずその場にいるすべての子ども達にとって学びにつながるためのやり方を学ぶことができました。
- 実際の学校現場でも知的学級や情緒学級との交流がありますので、ハンドブックの内容を参考にしたいと思いました。

研修実施者の声

- 今回の研修は、各障害種の特性を踏まえた指導対応方法を具体的にまとめている資料だったので、障害の有無に関わらず、スポーツを実施する人の特徴を踏まえ多様な指導方法の習得や、能力開発の貢献に資するとともにインクルーシブなスポーツ環境の整備につながることを期待される。
- 障害の有無やその他の違いに関わらず、すべての子ども達が同じ場所で共に学び、互いに尊重し支え合い、多様性を認めあえることができる教育を実現できるようにする。

公益社団法人広島県パラスポーツ協会

参加者:主に広島県内のパラスポーツ・ボランティアに関心がある学生、パラスポーツに関わる学生団体、医療・福祉に関わる学生

① 研修会の目的

- 広島県内には、アダプテッドスポーツクラブ(ASC)等、パラスポーツに関わる学生サークルが5団体ある。広島県パラスポーツ協会ではその状況に着目し、ボランティアを育成する上で学生を巻き込んだ事業を開催したいと考え、**学生の主体的なパラスポーツ振興につなげることを目的とした交流会が生まれた**。令和7年度で3回目の実施となる。
- 交流会では**パラスポーツを実際に体験する時間を設けたい**と考え、広島県ボッチャ協会に協力を依頼した。ボッチャ協会側も、審判の育成のため、講習会を開催したいという思いがあったため、交流会と審判講習会の同時開催が実現。

② 研修プログラム

- 【第一部】パラスポーツ講話「今日を楽しむ」
- 【第二部】ボッチャ審判講習会〈主催:一般社団法人広島県ボッチャ協会〉
- 【第三部】ワークショップ「ボッチャの入り口、広げよう」

講師

堀江車輛電装株式会社 中村 哲郎 氏

③ 研修内容

■ 講演

- 堀江車輛電装株式会社 中村 哲郎 氏より、ボランティアから仕事にした経緯や、パラスポーツに対する想いについて講話。
- 講話後は学生同士でグループワーク、発表を行った。

■ ボッチャ審判講習会

- 広島県ボッチャ協会指導の下、コートづくりやボッチャの基礎的なルール、審判の専門的な知識を学んだ。

■ ワークショップ

- 〈する・みる・ささえる〉の視点から、ボッチャに関わる仲間を増やすためのアイデアをグループで考え、発表した。
- 交流会の終わりに、ハンドブックの紹介を行った。



グループワークの様子



ハンドブックを紹介

地域のスポーツ指導員への研修にもハンドブックを活用したい

受講者の声

- 他の大学の人と交流することができたことで、いろいろなアイデアにふれることができたため、たくさんの学びある経験になった。
- 普段関わり合いを持たない人から色々な意見を聞くことができとても良かった。

研修実施者の声

- 手に取りやすく読みやすい内容でありながら、医学的要素も含まれていて読みごたえがある。
- パラスポーツ指導をするしないに関わらず、パラスポーツと一緒にやりたいと思った時に、ポイントがわかりやすい。これからパラスポーツに関わる、関わってみたい方々にぜひハンドブックを見てもらいたい。
- 地域のスポーツ指導員の研修の中で、ハンドブックをより効率的に活用できる機会があるのではないかと考えている。参加者はある程度の知識はあるが、特にパラスポーツの場合の具体的に注意すべきポイントを確認してもらうのに、このハンドブックはとてもよい。

順天堂大学 スポーツ健康科学部

参加者:順天堂大学スポーツ健康科学部1年生

① 研修会の目的

- 順天堂大学スポーツ健康科学部では、「体づくり運動」という授業で、「障害のある子どもに合わせた運動とは」というテーマで、座学から実技を実施。
- 受講する学生の多くは、パラスポーツに触れる機会・経験がほとんどなく、初めてパラスポーツを学ぶという人が多い。
- この授業を通じてスポーツ実施者の障害特性に合わせて工夫するというアダプテッドの視点が重要であるということを学生に学んでもらうことを目的にオンライン講義と実技を実施した。

② 研修プログラムの

- オンライン授業(★ハンドブックを活用)
 - 【課題】①知的障害のある児童生徒を想定し、みんなが参加できる「おにごっこ」を考えよう！！
 - ②肢体不自由のある児童生徒を想定し、新しい新体力テスト(スポーツテスト)を考えよう！
- 実技授業(ボッチャ) (★ハンドブックを活用):誰でも楽しめる、障害特性に合わせたボッチャ体験

講師

順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授 村上 祐介 氏

③ 研修内容

・各種障害の特徴の理解を深めるため、講義部分だけではなく実技授業での振り返りにも、ハンドブックを活用した。
<ハンドブック活用>

- ・ **オンライン授業:P.26、27知的障害・発達障害**
知的障害や発達障害のある子どもに対して指導する際に想定される状況や指導のポイントの説明をするために、ハンドブックを活用した。
- ・ **実技授業:P.10スポーツを指導する際の心構え**
運動指導をする場面の導入として、対象の人が一緒に楽しむにはどうすればよいか、というマインドを持ち一緒に考えることの重要性を説明。加えて、安全に配慮して行うということ、コミュニケーションをしっかりとること、などを説明。

【ボッチャ体験での学生のアイデアの一例】

目が見えない人と一緒にボッチャをする際に、全員で後ろを向き、見えないようにする方法を学生自身が提案、実施した。また肢体不自由で遠くにボールが投げられない子どもに対しては、手もとにあったノートや長椅子などを活用してボールを転がすための教材を考案した。



ハンドブックを活用した講義の様子

スポーツ関係のほか、特別支援学校教員養成の教材としても有用

受講者の声

- ・ 障害のある方へのスポーツの指導方法、指導の際に気を付けるべきことが書いてあり、わかりやすかった。
- ・ 障害のある方がスポーツを実施するためにできる工夫に、環境の工夫、実施する活動の工夫、指導対象者向けの工夫と、様々なアプローチがあることが印象的だった。
- ・ 実際に障害のある方と一緒にスポーツをしてみたいと思った。

研修実施者の声

- ・ 授業でハンドブックを学生に実際に使うことで、指導する側にとってもわかりやすく感じられた。
- ・ 特別支援教育に関する他の授業などで知識を学ぶときに、各障害種の説明部分は活用しやすい。体育の実技やスポーツだけでなく、特別支援学校の教員養成の導入にも使える。
- ・ ハンドブックを持っておくと、わからないことがあればいつでも振り返れるので、学生の今後の活動でも活用できるいいツールである。特に実習などで教育現場に行った後にハンドブックを振り返りとして使うと、経験で得た知識をさらに定着させられるのでよいと思う。

びわこ成蹊スポーツ大学

参加者:びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部スポーツ学科2年生

① 研修会の目的

- びわこ成蹊スポーツ大学では、令和7年度滋賀県開催の全国障害者スポーツ大会(全スポ)に選手団サポーターとして学部生約300名が参加。
- 大会に向けてのガイダンスを必修授業である「スポーツフィールドワークⅠ」で行い、**普段障害のある方とあまり接点がない学生が、障害に対する基本的な学びを得るとともに、学んだことを実際の現場で活かすことができるよう**、現場経験の豊富な大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋尊史氏に外部講師を依頼した。
- 学生が一番学ぶべきポイントを「コミュニケーション」と位置づけ、講義ではハンドブックを活用するとともに、**視覚障害のある方への説明を体験する模擬演習といったグループワークを取り入れた。**

② 研修プログラム

- 講義(大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋 尊史 氏)(★ハンドブック活用)
- グループワーク(視覚障害のある方への説明を体験する模擬演習を含む)
- まとめ

講師

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ政策・文化コース 主任/准教授 中道 莉央 氏
大阪市長居障がい者スポーツセンター 福嶋 尊史 氏

③ 研修内容

- 選手団サポートとして、各障害に必要なコミュニケーションを説明。
- テーマは**障害の理解とコミュニケーションの2つ**。参加する障害種別の特性を踏まえたコミュニケーションのポイントについて実技を交えながら講義を行った。

<ハンドブック活用>

- 障害種別ごとにスポーツ指導、関わり方のアドバイス等の説明を行った(P18～P29)。

グループワークの一例:「お弁当が届きました」(視覚障害)

- 2～3人のグループで、見える役と見えない役に分かれ、実際の障スポのお弁当の写真を使用し、見える役の人が、お弁当の中身と位置関係を見えない役の人に伝える。
→教示例)おかずが9つの仕切りで分けられている。手前に佃煮があり、時計回りに何が入っているか(何かを基準に)伝える。箸で触りながら理解していく。



ハンドブックを活用した講義の様子

スポーツ指導者・支援者として重要な「心構え」が学べる

受講者の声

- 普段使っている言葉が相手にとっては伝わりにくい言葉かもしれないということが分かったため、**表現方法・伝え方に気をつけたい。**
- 決めつけないことが意外と無意識にできてないと思ったので今後に生かせると思った。
- 視覚障害のある方の疑似体験や視覚障害のある方への説明を体験する模擬演習を通じて、**実際にイメージしやすかった。**

研修実施者の声

- ハンドブックのP10～P14には**指導する際の「心構え」**についてなど、**とても大事なことが書かれてある**。他のテキストには、こうした指導者の「心構え」については意外と触られていない。パラスポーツに関わる人は、障害やスポーツに関する知識を幅広く持ち、さらに倫理観も求められる。このハンドブックには、現場ですぐに使えるハウツーと、指導者や支援者として障害のある方に関わる際の理念や心構えの重要性を学ぶことができる内容が盛り込まれている。
- 後期からのパラスポーツ指導を模擬的に実践する授業でも、ハンドブックが役立ちそうだと考えている。

日本福祉大学

参加者：藤田紀昭研究室ゼミ学生（日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科3年生）
 ※実技授業（詳細下記）については日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科の2～3年生を対象

① 研修会の目的

- 藤田研究室のゼミでは、3年生の後期に、発達障害・知的障害のある児童に対して学生が指導プログラム（レクリエーション）を作成し、実践している。その準備段階で、**障害に対する理解をより深めるため、前期に障害に対する基本的な知識から指導法までを広く学び、その内容を復習する際にハンドブックを活用した。**
- また、日本福祉大学では上記ゼミのほか、**各競技の指導法の実技授業（バドミントン、水泳）において、障害のある方がいるときの対応・指導の方法について学習するために、ハンドブックを活用した授業を実施した（各授業1コマ実施）。**

② 研修プログラム

【藤田研究室のゼミ】

- 前期授業：発達障害・知的障害の児童への指導方法を一通り指導
- 夏季合宿：前期授業内容の振り返りと、後期の指導プログラムの実施に向けた準備（★ハンドブックを活用）
- 後期授業：プログラム指導案の作成、実践、振り返り

講師

日本福祉大学スポーツ科学部 スポーツ科学科 教授 藤田 紀昭 氏
 ※スポーツ指導法演習（バドミントン）：同学科 准教授 兒玉 友 氏
 ※スポーツ指導法演習（水泳・水中運動）：同学科 講師 坂口 結子 氏

③ 研修内容

- ゼミ合宿の冒頭に約1時間、ハンドブックを使った講義を実施。
- ゼミ学生は、これまで障害のある方と接した経験はほとんどなく、指導案を作る～提供するところで初めて障害のある方に接する人が多い。最初は人前で話すのも難しい学生もいたが、**輪に入れない子どもへの声掛けをどうするか、わかりやすく説明するために具体的な視覚情報を示すようにする、など授業やハンドブックで得た知識をプログラム実践の際に大いに活用できた。**

<ハンドブック活用>

- **3章の知的障害・発達障害（P.26～）のある方へのスポーツ指導を中心に活用した。**

【プログラムについて】

- 知的障害・発達障害の児童（小学生）を対象に4回（9～12月の毎月1回、土曜日）実施、毎回7～8名の児童が参加。
- プログラムは、挨拶のあと導入としてゲームやダンスをしてからレクリエーションを行う（フラフープや風船などを使用）。最後はパラシュート（直径5～7mの大きな円形の布）を使い皆でダンスして終了（約1時間）。



ハンドブックを活用した講義の様子

競技団体の指導者養成やスポーツクラブなど活用の可能性は多い

受講者の声

- 27ページの指導方法の留意点について、細かくわかりやすく具体的に書いてあったので、今後役に立つと思った。
- ハンドブックでは、文章だけでなくわかりやすいイラストもあり、実際自分がやる時にどのようにしたらいいかイメージしやすかった。
- コミュニケーションの取り方やてんかんが起きた時の対処法が書いてあったのが良いと思った。

研修実施者の声

- ハンドブックは様々な使い方が出来る。例えば一般のスポーツクラブ（地域のスポーツクラブ）にハンドブックを1冊でも置いておくことで、障害のある方が来た際の対応について、いつでも誰でも参考にできる。
- 競技の指導者についても、日本スポーツ協会の公認スポーツ指導者の養成プログラムの中にハンドブックを解説する時間を設けるなど、広く様々なスポーツ指導者養成の時にも使ってもらおうとよいのではないかと。

国際武道大学

参加者：「障がい者武道論」履修の国際武道大学体育学部学生(1年生)

① 研修会の目的

- 授業「障がい者武道論」では、**障害のある方への武道・スポーツ指導法の考察・開発、また、武道の現代的意義の一面を理解し、他者に伝えることができるようになることを到達目標としている。**
- 本ハンドブックの内容を通じて障害のある方へのスポーツ指導についての知識をより深めてもらう導入として、ハンドブックを活用して授業を実施することとした。

② 研修プログラム

- 講義(★ハンドブック活用)
- 実技授業(障害のある方も障害のない方も一緒に楽しめる運動の体験)

講師

国際武道大学 学長 松井 完太郎 氏

③ 研修内容

- 学生120名が出席。アリーナで行われた実習授業では、**柔道の帯で身体拘束した状態で準備運動したりと、様々な準備運動を障害のある方も障害のない方も一緒に楽しむことができるような内容で実施。**

<ハンドブック活用>

- **障害のある方へのスポーツ指導のメリット(P.14)を中心に活用した。**松井氏の経験等を含めたいくつかの事例を通じて、**障害のある方への指導法は初心者、高齢者、運動が苦手な人などの指導にも有効であることが多いこと**を学生に伝えた。

【富山県の特別支援学校での空手指導の事例を紹介】

- 例えば空手の正拳突きは左右の腕を交互に回旋させて突くが、動きを分解して説明指導すると、知的障害がある生徒は混乱しやすい。富山県の特別支援学校では、左右の腕を交互に回旋させながら徐々に腕を左右に揺らし、段階を間に挟むことで、短時間で正拳突きを習得させている。この方法は障害のある方への指導だけでなく障害のない方への指導にも応用できる。



ハンドブックを活用した講義の様子

障害のある方への指導方法は、スポーツ初心者にも活用可能

- ハンドブックはちょうどいい量にまとめられている。いかに削るかすごく難しい。よくここまで絶妙なバランスでエッセンスを残して作成してくれたと思う。また、選手のインタビューがあるが、こういうところから入ると入りやすくていい。二次元コードもあって使いやすい。
- P.14は障害のある方側のメリットではなく、指導者側のメリットについて言及している。これはとても重要なことである。
- 障害のある方への指導で得られる気づきや工夫は、スポーツ初心者への指導にも応用できる。何より重要なのは、指導者と受講者の双方がスポーツを楽しむ姿勢を持つことであり、本ハンドブックは、そのような指導者としてのマインドセットを学ぶための一助となる。
- 同じ障害でも一人ひとりの状態や背景が異なるため、指導者が本人や、その家族と丁寧にコミュニケーションをとって理解を深めることが大切であり、本ハンドブックは、そうした情報をもとに個々に合った指導のポイントを整理し、実践につなげる手助けとなる。

公益社団法人日本理学療法士協会

参加者:杏林大学近隣在住のボッチャ愛好家の一般シニア、杏林大学ボッチャ部学生

① 研修会の目的

- 講師である一場氏は杏林大学ボッチャ部監督でもあり、**地域を含めたボッチャの普及に取り組んでいる**。杏林大学周辺ではボッチャが普及し地域で定期的にボッチャを行っているシニアの方々が多いことから、シニアの方々と同大学の学生双方を対象とした研修会の実施を検討した。
- 地域でパラスポーツを実践しているシニアの方々を対象とした**講義形式の研修会と障害のある方を模してのボッチャ競技体験や、シニアの方々と杏林大学ボッチャ部学生との世代を超えた交流を通じ、パラスポーツの魅力の再発見を図ることを目的として、本研修会を実施した。**

② 研修プログラムの

- 講義(★ハンドブック活用)
- 車いす使用など障害のある方を模してのパラスポーツボッチャ体験
- ボッチャを通じた世代間交流(ボッチャ交流戦)

講師

杏林大学 保健学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻 准教授 一場 友実 氏

③ 研修内容

- 講義ではハンドブックを配布し、ハンドブックの内容を盛り込んだスライドを用いて説明。スライドの中には、ハンドブックの内容に加えて、ボッチャのシニアへの有用性について一場氏の研究結果も含めた。
- スライド説明後、研修会の内容である「障害のある方へのスポーツ指導・関わり方」を生かしていくために、**まず障害のある方がスポーツを実施する際に、どのようなところに不便を感じ、手伝ってほしいか、などを理解するため、車いすを使用して、障害のある方を模したボッチャ体験を行った。**
- ボッチャ体験の後、**世代間交流としてボッチャ交流戦を実施した。**(シニア3名と学生1名で1チーム)

<ハンドブック活用>

- **第三章 障害のある方へのスポーツ指導の実践**

車いす乗車体験

- 全員が車いすに乗車し、自身で操作しながらボッチャを行った。操作が難しい場合には学生が補助した。参加した方々は、この疑似体験を通じて、障害のある方の目線や立場に立ち、どのような課題があり対応が必要か、等を実感する機会となった。



車いす乗車でのボッチャ体験

障害のある方への対応について知識を得るよい機会となった

受講者の声

- 小学校、中学校などで学生を対象に、今回のような講習をしてほしい。(シニア)
- 障害を持っているため、こういった機会を通じてボッチャを体験することができ、良かったです。(シニア)
- 障害別によって、特徴が違って、それぞれ環境の整備等が異なることに興味を持った。(学生)
- 高齢の方とボッチャを通じた交流ができ、非常に有意義であった。(学生)

研修実施者の声

- 「障害のある方に対してどのように接してよいか、手助けしたらよいかわからない」というシニアの方々が、ハンドブックに記載されている話を聞いたり、車いす乗車体験により、対応の仕方を学び、さらには実践でき、今回の研修会はその導入として大変良い機会になった。
- 医療従事者ではない方、障害のある方と交流の機会が少ない方向けに、このハンドブックの前段階として、ハンドブック簡易版があってもよいかと考える。

順天堂大学大学院 保健医療学研究科

参加者：相澤純也研究室ゼミ所属の修士課程生、博士課程生

① 研修会の目的

- 大学院にはリーダー養成機関という役割もあるため、学生には広い知見や視野で、特にパラスポーツやインクルーシブ教育、障害を持った方々についての知見を深める必要がある。相澤教授は本ハンドブック作成に検討委員会委員として携わっており、数多くいる健康医療福祉関連職種の大学院生に対しての横展開モデルになるように、ゼミの授業でハンドブックを取り扱うこととした。
- 今回の授業は、理学療法士国家資格を有する大学院生に対して、ハンドブックの内容、実用性、有用性などについて、対教員・学生間で質疑応答、ディスカッションをしながらハンドブックへの親和性や理解度を高めてもらうためのものである。

② 研修プログラム

- 導入(★ハンドブック活用)
- ディスカッション(意見交換)
- アンケート配付

講師

順天堂大学 保健医療学部 理学療法学科 同大学院保健医療学研究科 理学療法学専攻
教授 相澤純也氏

③ 研修内容

- 受講者は全員理学療法士有資格者であり、障害に関する知識を有している。社会人学生であり、実際に障害のある方に対して支援をしている人もいる。今回はそうした、すでに知識を持つ層への研修となる。
- 障害に関する知識は既にあるため、それをスポーツ指導につなげるきっかけにする、あるいは人脈の中で話すきっかけを作ることを目指す。

<ハンドブック活用>

- 相澤教授がピックアップしたページについて簡単に説明した後、受講者が各トピック2、3名ずつ、感じたことについてコメントしていく形式で実施した。

<主なトピック例>

- 目的について
- 疑似体験について
- 視覚障害について
- 知的発達について
- 障害のある方が教えることについての波及性



ハンドブックを活用した講義の様子

ディスカッションのツールとして活用し当事者意識を醸成

受講者の声

- ハンドブックを読んだ人が、障害に対して理解を深め、障害のある方も一緒にスポーツに参加できるということを知ってもらえたらいいと思った。
- 競うことだけがスポーツではなく、個人と指導者の目的があって柔軟な対応がなされるという内容が印象に残った。
- 障害のある方でもスポーツが楽しめるようルールを変えていくという視点が大切。

研修実施者の声

- 内容がベーシックなので、大学1年生から4年生まで読解でき親和性が非常に高い。入門書として1年生から活用できるイメージ。コラムもあり30～40分くらいで使いやすい浅広さである。多くの専門家が作成に関わっている。
- 受講者の目線・立場に合った欲しい情報についてディスカッションできるよう、「この情報をあなたならどう使うか、周囲の人にどう使ってもらおうか」という投げかけで深掘りすると、当事者意識が高まり、印象に残って、ハンドブックの有用性が身に染みて「機会があれば使ってみよう」と、波及していくのではないかと。

白蓮会館

参加者:多機能型拠点いーはとーぶ(児童発達支援、放課後等デイサービス、生活介護)の職員、
重症児デイルームAQUA(児童発達支援(重心)、放デイ)の職員

① 研修会の目的

- 障害のある方が運動・スポーツを実施するにあたっては、障害の有無に関わらず、指導者が運動・スポーツを実施する方の特徴を踏まえた多様な指導方法を習得することが必要となる。
- これまで障害のある子ども向けの空手教室を実施している中で、指導者に対して伝えていなかったスポーツ指導法などについて、現場の職員に説明したいと考えていた。
- そうした中で、**指導者としてのマインドセットや指導対象の特徴を踏まえた指導のポイントやコツをまとめたハンドブックが良い教材になると考え、研修を実施した。**

② 研修プログラム

- 児童発達支援、放課後デイサービスの職員が参集する職場会議(終了後、本研修を実施)
- 講義(★ハンドブック活用)

講師

- ・株式会社きのえね 白蓮会館九州本部 山崎 博王 氏 ※メイン
- ・株式会社きのえね 白蓮会館九州本部 支部長 大野 英章 氏 ※補足等

③ 研修内容

- ・ 法人が実施している障害のある子ども向けの空手教室(「いーはとーぶ空手」)の子どもの特徴とその指導例を絡めて説明した。

<ハンドブック活用>

- **P.13指導対象者とのコミュニケーション**
障害のある方もない方もできるのがパラスポーツ。コミュニケーションを取っていくことで、障害への理解が見込まれる。

<本空手教室に通う子どもの例>

空手教室に通うAさんは、先生に足の開脚を見せてくれる。先生に見せて褒めてもらうというコミュニケーションをとることに喜びを感じ、居場所があると感じている。このような形で空手を続けることができ、良い運動習慣になっている。



ハンドブックを活用した研修の様子

● P.26、28 知的障害・発達障害、精神障害

職員が主に接している障害種を中心に解説した。指導のポイントは**粘り強く、わかりやすく、視覚情報で伝えること**。その中でも特に**大事なのは粘り強く接することであると、いくつかの事例を交えて説明した。**

網羅的で完成度が高い。リンク先から情報が得られ、使いやすい。

受講者の声

- ・ スポーツをすることで、障害の有無に関わらず見込まれる効果、障害のある方に見込まれる効果がそれぞれあることがわかり興味深かった。特に**発達障害の方への指導の方法は役に立てていきたい**と思います。
- ・ ハンドブックは、様々な障害についても詳しく記載しており、スポーツだけではなく**障害そのものについても知識を深めることができる**と思う。
- ・ 障害のある方のスポーツの効果や必要性が理解できた。今後、**利用者様の疾患や特性を理解し、その方に応じたスポーツ支援ができたらいいな**と思いました。

研修実施者の声

- ・ 遊び方やレクリエーションの実例を4ページほどにまとめてあるとよい。遊んでいる様子など、障害によって4種類くらい挿絵や写真付きで事例があるといい。
- ・ 普段は障害のない方を指導している指導者が、自身の指導の中に活用しやすいようなレクリエーションの事例を紹介すると、さらに活用の幅が広がる。そうした事例をハンドブックと一緒に配布すると、さらに理解が深まるのではないかと。

公益社団法人日本リハビリテーション医学会

参加者：同学会員を中心としたリハビリテーション医療に関係のある医師および医療関係者
(理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士等)

① 研修会の目的

- 本研修会は、第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会の日本リハビリテーション医学会パラスポーツ委員会セミナー企画として実施した。
- 今回の研修会では、パラスポーツ指導経験の有無にかかわらず、医療従事者間の情報共有、ネットワーク構築を図るために、研修会の中で総合討論(グループワーク)の時間を設けた。

② 研修プログラムの

- 【講演】①リハビリテーション診療におけるパラスポーツの意義(緒方氏★ハンドブック活用)
- 【講演】②リハビリテーション診療におけるパラスポーツ導入時の留意点(上出氏★ハンドブック活用)
- 【総合討論】

講師

- ① 東京大学医学部附属病院 リハビリテーション科 緒方 徹 氏
- ② 国立成育医療研究センター リハビリテーション科 上出 杏里 氏
- ※座長：横浜市立大学医学部 リハビリテーション科学 中村 健 氏

③ 研修内容

<ハンドブック活用>

- 前半は緒方氏がハンドブック第1章、第2章のパラスポーツの意義と、日常の診療について説明。普段の診療でスポーツを導入したいときにどうするか、その意義を説明した。
- 後半は上出氏が第3章「障害のある方へのスポーツ指導の実践」について紹介。症例を通して、障害のある子どもにスポーツを導入するときの工夫(学校や地域スポーツ機関との情報共有、連携など)を説明した。
- 講義後に、参加者は5つ程のグループに分かれて、以下の症例にスポーツを導入・検討する際に、どういった点に注意すべきか、具体的な導入提案も含めて検討し、参加者間で共有した。

【症例1】40代男性:脳脊髄炎による対麻痺患者。高次脳機能障害を合併し、家に引きこもりがち。スポーツ経験あり。

【症例2】小学生女兒:二分脊椎で排尿障害(尿失禁)のある児。パラスポーツに興味があるが、排泄ケアが心配で、男の子と一緒に参加を嫌がっている。



ハンドブックを活用した講義の様子

ハンドブックを読むことで、障害への理解のきっかけとなる

受講者の声

- 障害者医療に関わる機関にハンドブックを広く周知してほしいです。
- 障害の特徴を理解し、個人ごとの心理状態を考慮しつつスポーツ導入を検討する必要性を感じました。
- いろいろな情報がある中で安心して得られる情報のためハンドブックは導入にあたり非常に分かりやすかったです。

研修実施者の声

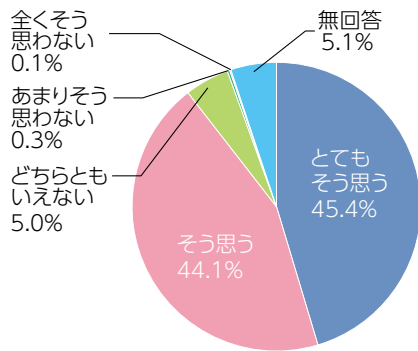
- 各障害の基本的な説明、スポーツ指導方法について、分かりやすく書いてあり、二次元コードで情報の取り出しができるようになっているので、活用しやすいと思います。
- 医療関係者に限らず、学校の先生やスポーツ関連施設の方にもハンドブックを知ってもらえると、障害ごとにどう関わればいいのかを知るきっかけになると思います。

まとめ① 受講者アンケート結果

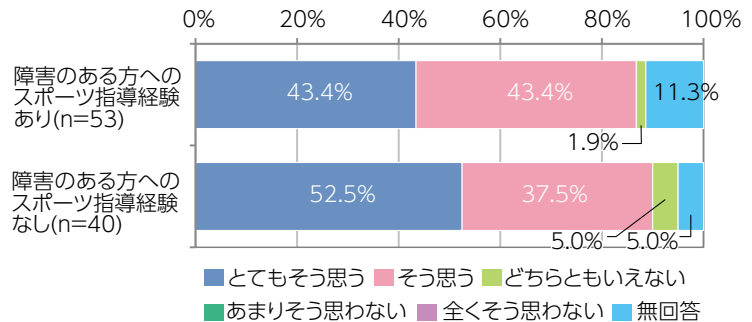
ヒアリングを行った研修実施団体のうち、了承いただいた団体については、研修終了後に受講者アンケートを実施しました。アンケートの結果から、ハンドブックを活用した研修の実施により、障害のある方へのスポーツ指導への理解を深め、今後の関わりについての意欲向上にもプラスの効果が見られることがわかりました。

質問1 「ハンドブックの内容は役に立つと感じましたか？」

障害のある方へのスポーツ指導経験の有無に関わらず、**全体の9割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答**



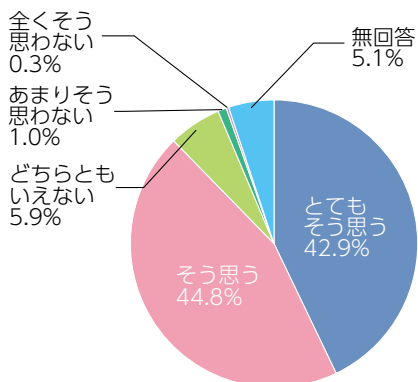
全体の回答結果 (n=723)



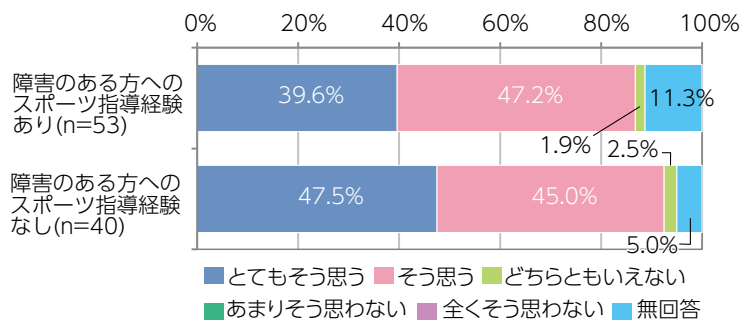
スポーツ指導者の回答結果
(障害のある方へのスポーツ指導経験有無別, n=93)

質問2 「研修やハンドブックを通じて、障害のある方へのスポーツ指導方法の理解が深まりましたか？」

障害のある方へのスポーツ指導経験「なし」の9割以上が「とてもそう思う」「そう思う」と回答



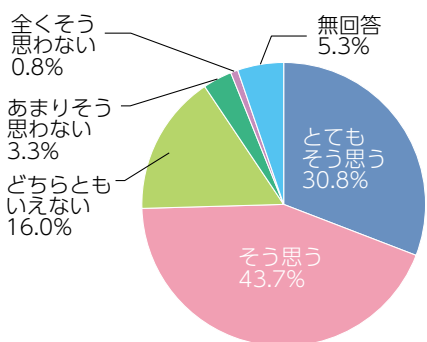
全体の回答結果 (n=723)



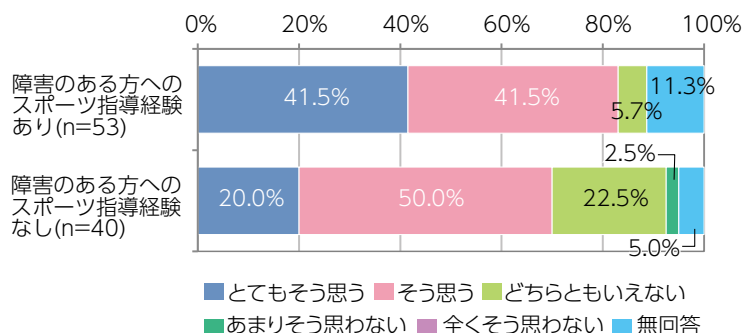
スポーツ指導者の回答結果
(障害のある方へのスポーツ指導経験有無別, n=93)

質問3 「ハンドブックの活用を通じて、今後、障害のある方へのスポーツ指導に積極的に関わりたいと思いますか？」

障害のある方へのスポーツ指導経験「あり」の8割以上、「なし」の7割が「とてもそう思う」「そう思う」と回答



全体の回答結果 (n=723)



スポーツ指導者の回答結果
(障害のある方へのスポーツ指導経験有無別, n=93)

【注】アンケート回答に協力いただいた受講者723名の属性(職業)について:学生76.5%、教職員7.2%、スポーツ指導者1.8%、その他12.7%、無回答1.8%

まとめ② ハンドブックを活用した研修実施のポイント

ポイント① ディスカッションのツールとして活用

ハンドブックが、ディスカッションを行う研修において、単なる課題や困りごとの共有のみならず、**対応策を考えるための情報・材料となり、準備の負担が軽減される。**

例) 公益財団法人横浜市スポーツ協会

様々な職員が集まって、何か成果を持ち帰ってもらえる研修方式として、グループワークを行うこととした。ディスカッションを通じて、互いの経験や困っていることを教え合い、対応を考えていく方式をとった。そのツールとしてハンドブックを活用した。

例) 順天堂大学大学院 保健医療学研究科

事前の大変な準備も必要なく、資料もそれほど必要ない。学生には1週間前に事前の情報を伝え、当日はハンドブックを活用したディスカッションをメインに進めた。学生には1~2個の質問やコメントを事前に用意しておくよう伝えている。

ポイント② パラスポーツ関連以外のスポーツ授業での活用

一般的なスポーツ実技の授業でハンドブックを活用することで、**障害のある方が障害のない方と一緒にスポーツに参加する場合、対応のポイント等をより具体的に伝えやすい。**

例) 日本福祉大学

① スポーツ指導法演習 (バドミントン)

パラスポーツの現状、障害のある方へのスポーツ指導の実践についてハンドブックを活用。

② スポーツ指導法演習 (水泳・水中運動)

ハンドブックを利用し、水泳における指導のみならず他の競技・種目も含め、障害のある方の指導をする場合の注意するポイントなどを伝えた。

ポイント③ 定期的な職員研修等で活用

スポーツ指導の実践を軸にポイントが整理されているので、定期的な職員研修等の中でも使いやすい。

例) セントラルスポーツ株式会社

店舗の全体ミーティングの中でハンドブックを活用した研修を実施した。ハンドブックに書かれた内容が共通言語となることで、障害のある方の指導に関わったことのある指導者と、ない指導者が一緒に研修をしてもどちらにも学びとなる研修となった。

ポイント④ 座学・実技で複数回活用

座学だけではなく、ハンドブックの内容を実技(体験)と結びつけると、より深く知識を定着させることにつながる。

例) 順天堂大学 スポーツ健康科学部

座学の授業で各種障害のページ等を紹介し、基礎的な理解を深めた。その後の実技の授業では、授業で経験したことを振り返る際に、ハンドブックを活用し、指導者のマインドセット、コミュニケーションの取り方などについて等、理論と実践の両面から学びを深めることができた。



スポーツ庁